

名古屋大学 2024 年度サマープログラム体験記

名古屋大学医学部医学科 3 年 劉 哲男

私は 2024 年度サマープログラムに参加することで、医学部生活を送るうえでかけがえない経験を数多くさせていただいた。本体験記では、そのような経験のうち特に重要だと考えるものをいくつか紹介する。

本プログラムは、米国及び中国の医学生を名古屋大学に招き、学生間の交流を深めるという趣旨で行われたものである。私は将来海外で医師として働くつもりはないが、今回の国際交流を通じて他国の医療制度を学ぶことで、日本の医療制度で優れている点、改善が必要な点を相対化して捉えることができ、将来日本で医師として働く上でも大変有意義な経験であった。

特に記憶に残っているのは、日本の地域医療について学ぶことができたことである。本プログラムではかがやきクリニックの先生方とともに実際に在宅医療を見学させていただき、また岐阜県の在宅医療の拠点であるかがやきロッジを訪問した。理事長の市橋先生は、少子高齢化・地方の過疎化が進む日本の将来の医療についてビジョンを持って活躍されている方であり、患者の幸せを実現するために医療が担うべき役割について語っていただいた。大病院では基本的に生物学的側面から患者を治療するのみであるが、生物学的に「健康」であることが必ずしも「幸せ」であるとは限らないとの考えから、患者の幸せにより直接的にアプローチできる在宅医療を始めたとのことだった。また、将来の医療過疎に対応するために、訪問医療の拠点をサテライト的に作る試みを行っており、また日本と海外の時差を活用して 24 時間対応が可能な遠隔医療を始めるなど、先進的な試みを多数行われていた。市橋先生のように、今後の医療に足りないものを見極め、行動できる医師は大変貴重であり、様々な課題が山積する現代においてこのような医師がいま求められているのではないかと感じた。

また、米国と中国の医学生と交流できたことも大変貴重な経験であった。米国で医学生になるには、通常の大学を卒業した後メディカルスクールに入学する必要がある。私自身も医学部入学以前に他の大学を卒業しているため、これまでのバックグラウンドを活かして医学に打ち込む姿には参考にできる点が数多くあった。中国からは北京大学の医学生が数名参加していた。一般的に日本での国際交流と言えば欧米をイメージしがちであるが、医療先進国の日本がアジアの国々と交流を深めてアジアの医療水準を向上させていくことも今後非常に重要であり、普段なかなか触れることのない中国の医療制度についても理解を深められ大変有意義であった。

日本の医学部のカリキュラムはほぼ全てが必修の授業で構成されており、毎日周りの皆と同じように授業を受け、国家試験に合格すれば医師になれる。これは、一定の技能・水準を備えた医師を養成する上では都合の良いシステムであるが、裏を返せばただ授業と試

験をこなしているだけでは周囲と同じような医師にしかねれないということでもある。一人前の医師として活躍するには、主体的に行動し、日本の医療の優れている点や問題点、他国の医療制度との違い、いま医療に求められているものなどを学ぶことが重要であると考えます。本プログラムは一週間という短い期間でありながら、国際交流にとどまらず、日本の医療や今後の医療に求められるものについて深い学びを得ることができる。医学部在学中にこのような機会を得られたことは大変貴重であり、将来の意思決定に役立つものであった。

